

原著論文

中国・内モンゴル自治区における寄宿生の教育問題

——社会的絆の視点から——

其巴嘎*

抄録

新中国の成立以来、中央政府は、基礎教育を普及させる政策に着手し、国民の教育水準は向上してきた。しかし、少数民族の多い地域や「辺境」の地など農牧区の普及は進んでいなかった。現地の自然環境や人口分散など多方面の要素を考慮に入れた寄宿制学校は、地域教育の現実的な問題を解決するのに一定程度の役割を果たした。先行文献を概観すると、寄宿生の教育問題に関して、家庭教育の機能や、社会的絆の視点から、理論的かつ実証的に検討された研究は少ない。

本稿は、家族や親元から離れて暮らすことが、親の愛着などの社会的絆、および教育上の発達やコミットメントと、どのような関係にあるのかを明らかにすることを目的とする。寄宿生の教育問題を探るべく、内モンゴル・オールドス市にある寄宿制学校の生徒を対象にアンケート調査を行った。また、寄宿生の教育問題に関して、家庭教育（親の愛着など）の関係性を探るために、寄宿生の親にインタビューを行った。さらに、寄宿制学校の現状のなかで、教師はどのような役割を果たしているかを考察するために、教師にもインタビューを行った。

調査を通して、寄宿制学校で暮らす生徒の教育問題と、親との愛着関係や教育上のコミットメントなどの社会的絆との関連性が示唆されたと同時に、寄宿生の社会的絆を増やしていくことは成績の向上などにメリットがあり、学業に関して一定の影響を与える可能性が示された。

キーワード：内モンゴル自治区、寄宿生、社会的絆、コミットメント、主観的学業成績

*関西大学大学院人間健康研究科 博士課程後期課程

Educational Problems of Boarding School Students in Inner Mongolia:
The Social Bonds Perspective

QIBAGA

Abstract

Since the establishment of the People's Republic of China, its central government has initiated policies to promote basic education, which has greatly improved the level of education. However, progress is slow in remote areas, such as agricultural and pastoral areas where different ethnic groups live. Considering multiple factors, including local natural environment and population dispersion, boarding schools have undeniably contributed to solving real-world problems. However, few studies have investigated the educational problems of boarding school students from the perspective of home education and social bonds.

This study tries to reveal the connection between children living apart from their parents and social bonds such as parental attachment, educational development, and commitment. To explore the educational problems, a questionnaire survey of boarding school students in Ordos, Inner Mongolia was conducted. Additionally, some boarding students' parents were interviewed to investigate the relationship between family education, such as parental attachment, and educational problems of boarding students. Furthermore, the teachers were interviewed to help examine the importance of their role in the current situation of boarding school students.

This study fulfils the following two purposes. First, it reveals the connection between the educational problems of boarding school students and social ties, particularly attachment to parents and educational commitment. Second, it establishes that improved social bonds help increase the possible benefits for students and positively impact their academic performance.

Keywords: Inner Mongolia Autonomous Region, Boarding student, Social bonds, Commitment, Subjective academic performance

はじめに

中国は悠久な歴史を経て発展してきた多民族国家で、さまざまな民族言語、文字、文化を有している。民族教育¹は、中国教育事業のなかでも重要であり、中国の平等、団結、互助といった要素がかかわる社会主義的な民族関係を強化し、国家の長期的な安定性を持続させる目的にとって、重要な戦略的意義をもつ。内モンゴル自治区（以下「内モンゴル」と略す）はモンゴル民族を中心とした少数民族自治区であり、モンゴル族以外に、漢族、満州族、回族、ダウール族、エヴェンキ族、朝鮮族など多くの民族で構成されている。

1949年に新中国が成立し、中国共産党は、旧教育制度に対する抜本的な改革を迅速に進めていき、労働者と農民が教育を受ける基本的な権利を保障した。1983年10月1日、鄧小平は北京景山学校で「教育は、現代化、世界、未来を志向すべきである」と宣言した（陳・崔1984）。このスローガンは、すぐに全国に広がり、社会主義教育の重要な指針となり、中国の特色ある社会主義教育の道を切り開いてきた。しかし、当時の教育基盤は脆弱で、非識字率が非常に高いなどの原因で、教育を発展させることは困難だった。特に、少数民族の多い地域や、自然環境が厳しい地区の教育の普及は進んでいなかった。こうした地域の教育を発展させるため、寄宿制学校が設立された。

当初、寄宿制学校は少数民族地域に設立されたが、2001年に公布された国務院「基礎教育改革と発展に関する決定」では、小学校については、各児童が近隣の学校に入学できるように配置し、中学校については、合理化を図ると同時に教育効果を損なうことのないように、人口密度、地理環境、経済水準などの条件にあわせて配置するとしている。ここで重要なのは、寄宿制学校を認めるとしていることである（麗 2018: 73）。

寄宿制学校は、多くの子どもたちの教育に対するニーズを満たし、教育への分散投資を減少させ、農牧地域の子どもの通学上の利便性などの問題の解決へと導いたが、そこで暮らす子どもたちのなかでは、心理問題、教育問題、安全問題といったさまざまな問題も浮き彫りになった（白 2009: 20）。

本稿は、寄宿生が長期間、家族や親元を離れて暮らすことが、彼・彼女らの教育に与える影響について注目する。この問題に取り組むために、ハーシの社会的絆理論（Hirschi 1969）を補助線にして、家族や親元を離れて暮らすことが、親の愛着などの社会的絆、および教育上の発達やコミットメントと、どのような関係にあるのかを明らかにすることを目的とする。寄宿生が、長期間家族や親元から離れて暮らすことで、親との交流が減ったり愛着関係が弱まったりすることは、寄宿生の教育に影響を与える要因の一つになるというのが本稿の仮説となる。教育上の課題と、親との愛着、コミットメントの関係性を明らかにするため、寄宿生にアンケート調査、寄宿生の保護者および教師にインタビューを行った。

本稿の特徴は、ハーシらの社会的絆理論を補助線にして、寄宿生の教育問題を検討していくところにある。彼は (Hirschi 1969=1995)、個人を社会に結びつける4つの絆が弱まったときに非行に走ると指摘し、そのなかでとくに、「愛着」絆の重要性を強調している。本稿では、アンケート調査やインタビュー調査を通して、寄宿生の主観的学業成績は親との愛着の絆との関連性が見られたと同時に、寄宿生が学校生活を送るなかで、親との愛着の絆以外の絆も形成され、彼らの学業成績に影響を与える可能性についての視点を提供することができる。

アンケート調査やインタビュー調査の対象者を内モンゴルとしたのは、内モンゴルは面積が広く人口の少ない、遊牧生活を主とした多くの少数民族が住んでいる自治区であり、当時の寄宿制学校が設立された条件に合致しているところにある。内モンゴルの民族学校では、民族語と中国語といった双語教育を行っている。また、内モンゴルは筆者の出身地である。

第1節では、中国の教育部が公布した決定書、先行文献に基づき、新中国の成立以来の教育発展史を概観した上で、寄宿制学校の起源を説明し、教育の発展における寄宿制学校の役割、および寄宿生に関する課題を明らかにする。第2節では、ハーシの社会的絆理論を補助線にし、寄宿生の教育問題について検討する。第3節では、寄宿生を対象にしたアンケート調査結果の考察、および寄宿生の親や教師を対象として行ったインタビュー調査結果を分析し、考察する。第4節では、本稿の結論として、得られた結果や示唆された可能性についてまとめる。

1 中国における学校教育

1.1 寄宿制学校の展開

郭(2014)は、寄宿制学校とは、分散した農村人口の特性に合わせ、通学困難などの生徒の問題を解決し、農村部の学齢児童・青年の義務教育修了を確実にするための特殊な学校形態であると論じている。当初、寄宿制学校が、少数民族が多く住んでいる地域や、自然環境が厳しい農村部に設立されたのは、中国の人口分散の特徴および国家政策に応じたものである。中国の人口分布は地形により東南部の人口が多く、西北部の人口が少ない特徴がある。西北部は広大な面積をもつが、人口分散などのため、農牧区の学校配置がまばらであったり、小規模であったりしたことが問題視され、教育資源の浪費や教育条件の整備があまり進んでいないのが実状であった。これに加えて、1990年代半ばから後半にかけて、「一人っ子政策」の実施により、学齢人口の減少、都市化の進展に伴う矛盾がますます顕著になってきた。こうした実状に応じて寄宿制学校が設立されたことにより、小規模学校の統合や撤廃による学齢児童の通学上の不便さ、および教育資源の浪費などの問題を解決することができたといえる。

新中国が成立した当初、各少数民族地区の立ち遅れた教育は、経済の発展の重大な足枷となっていた。基礎教育が遅れている現状を変えることが喫緊の課題であり、経済発展の重要な

条件であった。そのため、各級政府（地方各級人民政府）は、少数民族地区の個別の自然条件に即した学校運営方法を模索し、この時期において、少数民族地区では、半日制小学校、巡回小学校²、ユルト小学校³、小規模寄宿制小学校などの小学校を運営していた（烏 2013: 3）。

1950年代ごろに、新中国成立後の最初の民族寄宿制小学校が、四川省の少数民族地区に設立された。この寄宿制小学校は、主に国家の負担により運営してきたが、当時の経済水準では、このような無償教育をサポートするのがかなり困難であったため、50年代半ばに学生募集を停止した。その後、雲南イ族自治区、青海省など少数民族が多く居住している地域には、多くの寄宿制学校が成立されたが、「文化大革命」の中で廃止されてしまった（董 2014: 12）。このような各民族地方は、自然条件に応じて寄宿制小学校を設立したが、国民経済がようやく回復し始めたばかりだったため、中央政府は多くの民族寄宿制小学校をサポートすることができなくなった。

烏（2013）によれば、1982年に新疆ウイグル族自治区イリのカザフ自治州において、「全国牧畜地区・山間地区における少数民族寄宿制小中学校の経験交流会」が開催された。これを通して、内モンゴルを含めた多くの少数民族の牧畜区は、寄宿制小中学校の開校に尽力し、重要な学校運営形態になるとともに、基礎教育の普及は促進された。

1983年から雲南省、青海省など地区は、寄宿制小中学校を新設し続けた。1986年には牧畜区と僻遠地区で寄宿制小学校667校の学校を新設し、全区に寄宿する小学生は約63,000人、寄宿する中学生は約94,000人に達した。同じく広西チワン族自治区、寧夏回族自治区、甘肅省など地域も、寄宿制小中学校を開催し、寄宿制制度を実施した（董 2014: 13）。

2000年代に入ると、全国の多くの地区は、九年義務教育の目標の完成に伴い、寄宿制学校の運営を農村教育問題の解決手段として、全国各地で、このような学校運営の形式を積極的に採用するようになった。「九年制義務教育を基本的に普及させ、青壮年の非識字を基本的に一掃する」ことを目標とした西部「両基」攻堅任務を遂行する際に、農村部の寄宿制学校の建設を通して、経済発展が遅れている地区の教育システムを改善し、九年義務教育を普及させることができた。この政策を押し進めるなかで、全国各地の農村部において、現地の政府の主導で寄宿制学校を建設し、義務教育の普及を促したと言える。2001年5月に公布された国务院「基礎教育改革と発展に関する決定」は、寄宿制学校の範囲を全国まで広げることを示したものである。

教育部規劃司2011統計データによると、全国農村小中学校の在校生は約1億949万人（小学生約7319万人、中学生約3630万人）、寄宿制学生は約2908万人に達し（小学生約988万人、約中学生1920万人）、農村小中学生の総体寄宿率は26.6%を上回った。小学と中学と二つの段階に分けた統計によると、農村中学生の方が、寄宿率が高く、2011年全国農村中学生の寄宿率が52.88%、16省の中学生寄宿率が50%を上回り、6省の寄宿率が60%を超え、広

西省の中学生寄宿率が 88.03%に達した。地域で見ると、西部 12 省区の寄宿率が全国より高く、2011 年西部全体農村地域の義務教育段階の学生の寄宿率が 34.3%だった（董・熊 2013）。上述のデータからみると、寄宿生の数が膨大で、寄宿率も漸増しつつある。寄宿制学校は農村の義務教育を普及させるのに重要な役割を果たし、農村教育を発展させるのに必要な学校運営であると言っている。

寄宿制学校の優れた教育資源の形成力によって、農村寄宿制学校は急速に発展した。特に、多くの教育上の処点と小規模学校の撤廃に伴い、小学生の寄宿需要は日増しに高まっていった。また、農村部の余剰労働者が出稼ぎに出るにつれ、農村「留守児童」⁴の教育問題が社会問題になり、家庭での教育と教育の欠如を補うことが寄宿制学校の新たな社会役割になったとも言える。寄宿制学校は、農牧区の義務教育の普及のみならず、「留守児童」の教育問題の解決という新たな役割を担うことになった。

社会の急速な発展に伴い、中国にもイギリスのような高所得・高学歴層を対象としたパブリック・スクール型の寄宿制学校も設立された。だが、このエリート教育型寄宿制学校への需要は少なく、幼稚園から大学までの一貫校は、国公立のトップ校であることが多いため、一般の国公立校を選ぶ人が多く、また、このようなエリート教育型学校の高い学費を負担できる家庭が少ないなどの原因で普及していない。そのため、中国の教育学や社会学においては、パブリック・スクール型の寄宿制学校ではなく、一般の寄宿制学校が注目されることが多い。

1.2 先行文献の分析

寄宿制学校は、農牧地区の子どもたちの教育問題の解決に大きな役割を果たし、全国に広がっていった。しかしながら、寄宿制学校およびそこで暮らす子どもたちにさまざまな問題が起きていることが指摘されている。

張（2019）、李ら（2018）は寄宿生に観察、インタビュー、アンケート調査を行い、生徒の心理および生活について分析した。結果として、第 1 に、寄宿生の心身の健康には、家庭の要素が極めて重要な意義を持っている。農村での出稼ぎ労働者の増加に伴い、多くの子どもたちは大人とのコミュニケーションやケアが不足しており、親は子どもの生活や心理的变化を理解しておらず、子どもの感情の変化やニーズを無視している。第 2 に、学校教育が寄宿生の心理を左右する大きな役割を占めている。単調な放課後の生活は子どもの視野を制限させ、陰鬱な気分させる。第 3 に、社会環境が寄宿生の心理健康に影響を与えている。多くの寄宿制学校は閉鎖的な運営モデルであるが、その集団に存在する一連の悪い気風は、子どもの心身の健全な成長理念と乖離している。知らず知らずのうちに子どもの心理を歪ませ、多かれ少なかれ子どもに健全で正しい三観（世界観、価値観、人生観）を形成させることの妨げとなっている。農村でのコンピュータの普及に伴い、インターネットが急速に浸透し、不健全なメディア情報

が、子どもの心身健康に悪い影響を与えているという。

穆（2019）らの研究によれば、寄宿生は、休日以外は学習と生活のほとんどを学校内で過ごすことで、校内での安全教育に新たな課題が生じているという。学生は、電気の安全使用に関する注意事項、消防常識、火災時の正しい避難方法への理解が不足していると述べている。

また、后・袁（2019）、何（2015）らの寄宿制学校教育に関する研究では、教師は教育活動において重要な役割を果たしているが、農村寄宿制学校のほとんどの教師に経験と能力が不足しているため、それが教育の質に影響を与えていることが指摘されている。寄宿制学校は各種の規則制度を利用して教師の行為を厳格に規範化しているが、その反面、柔軟性と伸縮性に欠け、実際の管理効果の発揮にマイナスの影響を与えていると述べている。

上述のように、寄宿生に教育問題が起きるのは、さまざまな要因があると論じられているが、筆者は、寄宿生が、長期間、家族や親元から離れて暮らすことは、親子の愛着、交流を阻害することになるため、寄宿生の教育に影響を与える要因の一つになると考えている。この仮説のもとに、実際に寄宿生にはアンケート調査を、寄宿生の親にはインタビューを行い、分析を実施することで、親元から離れて暮らすことは親の愛着などの社会的絆、および教育上の発達やコミットメントと、どのような関係にあるのかを明らかにすることが本稿の主眼となる⁵。

2 社会的絆理論と教育との関係性

第1節でみたように、寄宿制学校管理方法の欠点、寄宿生の心理問題、安全問題といった視点から寄宿生について検討された研究が多いが、寄宿生の教育問題に関して、家庭教育の機能や、親との愛着関係の視点から、理論的かつ実証的に検討された研究は少ない。本稿は、寄宿生の教育問題を親との愛着関係の視点から、ハーシの社会的絆理論を補助線にして考察するところに一つの特徴がある。

2.1 社会的絆理論とは

社会的絆理論は、1969年にアメリカの社会学者であるトラビス・ハーシ（1935-）が提唱した理論で、ボンド理論とも称される。ボンド理論においては、愛着（attachment）、コミットメント（commitment）、巻き込み（involvement）、規範観念（belief）という4つの絆があり、個人がこれらの社会的絆をもつことこそ、犯罪や非行の抑制要因となるという考え方である。

ハーシの社会的絆理論によれば、社会に対する個人の絆が弱くなったり、失われたりする時、非行は発生する。上述のように、個人の非行を抑制する社会的絆として、次の4要素を挙げている（Hirschi 1969=1995: 29-44）。

1 愛着（attachment）：他者にたいする個人の愛着。

2 コミットメント (commitment) : ある一連の活動のために個人は時間やエネルギーを、時に自分自身にさえも投資することがあるとする。

3 巻き込み (involvement) : 人は社会の既存の枠組みにそった事柄に忙殺されている限り、逸脱行動にふける暇など無い、というものである。

4 規範観念 (belief) : 規則の道徳的妥当性に関する規範観念。

愛着とは、個人が他者や社会への感情的な愛着を形成する絆として働き、個人の非行を抑制する主要な絆である。少年は、親、学校、仲間などへの感情的愛着が強ければ強いほど、犯罪や非行に走らない。他者からの愛着や他者への愛着を感じる時愛着の絆が生まれ、犯罪や非行の抑止力となる。

コミットメントとは、個人が時間やエネルギーをかけ、社会的に望ましい目標を達成する際に、犯罪行為をしようとした場合、逸脱がもたらすリスクや恐怖を考慮し行動させる意識的な絆である。学業や仕事のなかで、積み重ねてきた成果を失うと、これまでの成果が台無しになってしまう。これまでの努力を無駄にしたくないため、引き続き頑張っていく。この絆は「投資」と考えれば分かりやすいであろう。

巻き込みとは、日常的な事柄に忙しく、犯罪や非行を考える暇がないことをいう。個人が、自分の学業や仕事に興味深く、その活動にかかる時間とエネルギーの役割が大きくなれば、退屈を感じることもなく、学業や仕事に集中するようになる。そのため、犯罪や非行に関わる機会が少なくなり、犯罪に走るリスクも低下する。

規範観念とは、個人が団体や社会のルール・法律は守るべきであるという信念が強ければ、犯罪や非行に走らない、というものである。個人が社会的道徳規則や法律へ疑問をもつとき、尊敬する気持ちが弱まったりするため、犯罪や非行に走る可能性が高くなる。

つまり、社会的絆理論では、人が犯罪に走らないのは社会との絆があるからであり、その絆が弱まったり、壊れたりしたときに犯罪に走ると考えられる。

ハーンは個人の非行を抑制する4つの要素のなかで、愛着の絆を第一の要素だと論じている。その愛着の絆の対象のなかでも、特に「親」との重要性を強調している。

寄宿生のように、寄宿制学校で集団生活をしながら教育を受けていることは、寄宿生の親との愛着関係を薄くし、家族との関係を疎遠にさせ、親への愛着の絆が弱くなると考えられ、その結果、寄宿生の心理変化、学習成績などに影響を与え、何からの逸脱行動を引き起こす可能性も否定できない。ただし、ボンド理論は、親との愛着以外の絆の可能性についても重要な示唆を与える。

2.2 社会的絆理論と教育の関係性

社会的絆理論は、人が犯罪をしないのは社会との絆があるからで、その絆が弱まったとき

や、壊れたときに犯罪に走るといった論点を提供するものだが、教育現場でも着目され、特に不登校の問題にも適用されることが多い。本稿では、社会的絆理論を補助線にして、寄宿生の学習の側面と関連付けて注目した。

社会的絆理論を寄宿生に照らしてみると、寄宿生は、学校で集団生活をするのは、教師と仲間との「愛着」が生まれ、学齢期から学校で勉強することは、未来に向けての「コミットメント」であり、毎日忙しい学校生活を送るのは、「巻き込み」であり、学齢期になれば、学校に行くことは当たり前なことだと思うのが、「規範観念」ということになる。学校は行くべきという義務感や学校生活に楽しめることなどは、子どもと学校を結びつける役割を果たしているが、こうした絆が失われると、学校に行く意欲は低くなり、学習について退屈だと感じたりするようになる。

寄宿生のように、長期間、家族や親から離れて集団生活をするのは、たとえ教師や仲間との愛着が強くなったとしても、かえって親との愛着を弱めていくという側面もある。毎日勉強ばかりで、休み時間が少なく、リラックスできる活動がないと、学校生活は退屈だと思い始め、学校に行きたくなくなり、未来に向けてのコミットメントが弱くなる。その結果、「学校は行くものである」という信念も弱くなってしまふ。このように、社会的絆が弱まると、寄宿生の学習面に与える影響が大きく、学業成績が落ちたり、不登校になったりする可能性があると考えられる。

3 アンケート調査とインタビュー調査の分析と考察

3.1 研究方法

まずは、回答者の基本属性を確認した。次に、各変数間の相関分析および性別による各変数の独立サンプルの検定分析を行った。最後に、年齢層による各変数の分散分析を実施した。分析にあたっては統計処理ソフトウェア IBM SPSS Statistics 27 を用いた。

3.2 倫理上の配慮

本アンケート調査およびインタビュー調査は、関西大学人間健康学部・人間健康研究科研究倫理委員会の承認を受けて（審査番号 2021-02）から行った。当初は筆者が帰国して現地の A 学校にいき、アンケート調査を行う予定だったが、コロナ禍で帰国できなくなったため、アンケート調査の質問紙を、生徒の保護者的立場にある現地の A 学校の担当教師に配布を依頼した。但し、アンケート調査実施やインタビューにかかる説明とインタビューは、すべてオンラインで筆者が実施した。

3.3 アンケート調査結果

本アンケート調査は、内モンゴル・オールドス市・オトク旗のA学校の中学2年生の40人を対象とした。回収数が37件、有効回答数が35件、有効回答率は92%であった。性別は、男性45.7%、女性54.3%、年齢は、13歳17.1%、15歳17.1%、16歳2.9%であり、14歳が62.9%でもっとも多かった。

表1の通り、「教師とのコミュニケーション頻度」と「保護者とのコミュニケーション頻度」の検定の結果 $p < 0.01$ で有意となり、 $r = .486$ で、比較的強い相関が認められた。「教師とのコミュニケーション頻度」と「寄宿生の学業成績」の検定の結果 $p < 0.05$ で有意となり、 $r = .415$ で、比較的強い相関が見られた。「教師とのコミュニケーション頻度」と「親からの関心度」の検定の結果 $p < 0.01$ で有意となり、 $r = .446$ で、比較的強い相関がある。「教師とのコミュニケーション頻度」と「親がそばにいることによる影響」の検定の結果 $p < 0.01$ で有意となり、 $r = .464$ で、比較的強い相関が見られた。「教師とのコミュニケーション頻度」と「ルームメイトとの仲の良さ」の検定の結果 $p < 0.05$ で有意となり、 $r = .381$ で、弱い相関が認められた。「保護者とのコミュニケーション頻度」と「学業成績の満足度」の検定の結果 $p < 0.01$ で有意となり、 $r = .481$ で、比較的強い相関が認められた。「保護者とのコミュニケーション頻度」と「親からの関心度」の検定の結果 $p < 0.01$ で有意となり、 $r = .720$ で強い相関が見られた。「保護者とのコミュニケーション頻度」と「親がそばにいることによる影響」の検定の結果 $p < 0.01$ で有意となり、 $r = .437$ で比較的強い相関がある。「保護者とのコミュニケーション頻度」と「ルームメイトとの仲の良さ」の検定の結果 $p < 0.01$ で有意となり、 $r = .492$ で比較的強い相関が認められた。「寄宿生の学業成績」と「学業成績の満足度」の検定の結果 $p < 0.05$ で有意となり、 $r = .398$ で弱い相関が見られた。「学業成績の満足度」と「親からの関心度」の検定の結果 $p < 0.01$ で有意となり、 $r = .552$ で比較的強い相関が認められた。「学業成績の満足度」と「親との連絡頻度」の検定の結果 $p < 0.05$ で有意となり、 $r = .428$ で比較的強い相関がある。「親からの関心度」と「親がそばにいることによる影響」の検定の結果 $p < 0.05$ で有意となり、 $r = .420$ で比較的強い相関が見られた。「親からの関心度」と「親との連絡頻度」の検定の結果 $p < 0.05$ で有意となり、 $r = .351$ で弱い相関がある。「親からの関心度」と「ルームメイトとの仲の良さ」の検定の結果 $p < 0.01$ で有意となり、 $r = .650$ で比較的強い相関が認められた。「親との連絡頻度」と「ルームメイトとの仲の良さ」の検定の結果 $p < 0.05$ で有意となり、 $r = .353$ で弱い相関が見られた。

表2では、各変数に男女の差がないかどうかを分析した。独立サンプルの検定の結果、教師とのコミュニケーション頻度に、有意な差が見られた($t(33) = 2.133, p < .05$)。女性の方が男性より有意に教師とのコミュニケーション頻度が高い。寄宿生の主観的学業成績に、有意差が見られた($t(32.996) = 2.259, p < .05$)。表から見てみると、女性の方が男性より主観的学業成

表 1 各変数間の相関関係

| 教師とのコミュニケーション頻度 | 保護者とのコミュニケーション頻度 | 成績 | 寄宿生の学業 | 学業成績への満足度 | 親からの関心度 | 親がそばにいることによる影響 | 親の愛着の必要性 | 親との連絡頻度 | 寄宿生活の満足度 | ルームメイトとの仲の良さ |
|------------------|------------------|--------|--------|-----------|---------|----------------|----------|---------|----------|--------------|
| 1 | | | | | | | | | | |
| 教師とのコミュニケーション頻度 | 1 | | | | | | | | | |
| 保護者とのコミュニケーション頻度 | .486** | 1 | | | | | | | | |
| 寄宿生の学業成績 | .415* | 0.295 | 1 | | | | | | | |
| 学業成績への満足度 | 0.283 | .481** | .398* | 1 | | | | | | |
| 親からの関心度 | .446** | .720** | 0.299 | .552** | 1 | | | | | |
| 親がそばにいることによる影響 | .464** | .437** | -0.079 | 0.174 | .420* | 1 | | | | |
| 親の愛着の必要性 | -0.17 | 0.111 | -0.09 | 0.066 | 0.095 | 0.314 | 1 | | | |
| 親との連絡頻度 | 0.206 | 0.304 | 0.209 | .428* | .351* | 0.324 | 0.209 | 1 | | |
| 寄宿生活の満足度 | 0.195 | -0.037 | -0.057 | -0.158 | -0.069 | 0.178 | -0.199 | -0.008 | 1 | |
| ルームメイトとの仲の良さ | .381* | .492** | 0.164 | 0.33 | .650** | 0.296 | 0.015 | .353* | -0.014 | 1 |

注：** p<0.01 , * p<0.05 水準で有意（両側）な相関があることを示す。

表 2 男女別の平均値と SD および t 検定の結果

| | 女性 | | 男性 | | t 値 |
|------------------|-----|------|-----|------|--------|
| | M | SD | M | SD | |
| 教師とのコミュニケーション頻度 | 2.0 | 0.75 | 2.6 | 0.81 | 2.133* |
| 保護者とのコミュニケーション頻度 | 1.7 | 0.58 | 2.0 | 0.75 | 1.332 |
| 寄宿生の学業成績 | 1.6 | 0.69 | 2.1 | 0.57 | 2.259* |
| 学業成績への満足度 | 2.4 | 0.60 | 2.5 | 0.73 | 0.587 |
| 親からの関心度 | 1.2 | 0.42 | 1.5 | 0.82 | 1.283 |
| 親がそばにいることによる影響 | 1.8 | 0.63 | 1.9 | 0.72 | 0.375 |
| 親の愛着の必要性 | 1.8 | 0.63 | 1.8 | 0.75 | 0.099 |
| 親との連絡頻度 | 1.7 | 0.48 | 1.6 | 0.62 | -0.319 |
| 寄宿生活の満足度 | 1.8 | 0.71 | 1.7 | 0.48 | -0.486 |
| ルームメイトとの仲の良さ | 1.2 | 0.37 | 1.5 | 0.73 | 1.695 |

注：** p<0.01 , * p<0.05 水準で有意差（両側）があることを示す。平均値が高いほど、それぞれの変

数項目の程度は弱くなることを意味する。

表 3 年齢層による各変数の分散分析

| | 13 歳 | | 14 歳 | | 15 歳 | | 16 歳 | | F | P |
|------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|---------|
| | M | SD | M | SD | M | SD | M | SD | | |
| 教師とのコミュニケーション頻度 | 2.143 | 0.690 | 2.150 | 0.813 | 2.667 | 0.516 | 4.000 | 0.000 | 2.580 | 0.072 |
| 保護者とのコミュニケーション頻度 | 2.000 | 0.577 | 1.650 | 0.587 | 2.000 | 0.632 | 4.000 | 0.000 | 5.417 | 0.004** |
| 寄宿生の学業成績 | 1.857 | 0.690 | 1.700 | 0.657 | 2.000 | 0.632 | 3.000 | 0.000 | 1.433 | 0.250 |
| 学業成績の満足度 | 2.429 | 0.787 | 2.350 | 0.587 | 2.500 | 0.548 | 4.000 | 0.000 | 2.225 | 0.106 |
| 親からの関心度 | 1.143 | 0.378 | 1.250 | 0.444 | 1.500 | 0.548 | 4.000 | 0.000 | 12.539 | 0.000 |
| 親がそばにいることによる影響 | 1.439 | 0.535 | 1.800 | 0.696 | 2.167 | 0.408 | 3.000 | 0.000 | 2.718 | 0.062 |
| 親の愛着の必要性 | 1.429 | 0.535 | 1.850 | 0.671 | 2.000 | 0.894 | 2.000 | 0.000 | 0.908 | 0.449 |
| 親との連絡頻度 | 1.429 | 0.535 | 1.600 | 0.503 | 1.833 | 0.408 | 3.000 | 0.000 | 3.290 | 0.034* |
| 寄宿生活の満足度 | 2.000 | 1.000 | 1.750 | 0.444 | 1.667 | 0.516 | 1.000 | 0.000 | 0.933 | 0.437 |
| ルームメイトとの仲の良さ | 1.000 | 0.000 | 1.250 | 0.444 | 1.667 | 0.817 | 3.000 | 0.000 | 6.152 | 0.002** |

注：** p<0.01 , * p<0.05 水準で有意差（両側）があることを示す。

表 4 変数項目と質問項目の参照表

| 変数項目 | 質問項目 |
|------------------|---------------------------|
| 教師とのコミュニケーション頻度 | 教師と学習の状況について話し合いますか？ |
| 保護者とのコミュニケーション頻度 | 保護者と学習の状況について話し合いますか？ |
| 寄宿生の学業成績 | あなたの成績はクラスの中でどのぐらいですか？ |
| 学業成績への満足度 | 現在の学習成績に満足していますか？ |
| 親からの関心度 | 親はあなたの学習、寄宿生活に関心を持っていますか？ |
| 親がそばにいることによる影響 | 親がそばにいると学習に役に立つと思いますか？ |
| 親の愛着の必要性 | 現在あなたは親の愛が必要だと思いますか？ |
| 親との連絡頻度 | どのぐらいの頻度で親と連絡しますか？ |
| 寄宿生活の満足度 | 現在の寄宿生活に満足ですか？ |
| ルームメイトとの仲の良さ | ルームメイトとの仲は良好ですか？ |

績が高い。他の変数には、男女差の有意差が見られなかった。

表 3 からは、寄宿生の保護者とのコミュニケーション頻度については、14 歳の寄宿生の方が他の年齢層の寄宿生より保護者とのコミュニケーション頻度が高いことである。また、寄宿生の親との連絡頻度については、13 歳が親との連絡頻度が最も高い、次に 14 歳である。寄宿生のルームメイトとの仲については、13 歳が最も良く、次に 14 歳が良好であった。

3.4 インタビュー調査結果の概要

本インタビュー調査は、内モンゴル・オールドス市・オトク旗の A 学校の寄宿生活をしている中学 2 年生の親 3 名、当学校の教師 3 名を対象にした。親 3 名はクラスのなかで、成績が上位

(保護者B)、中位(保護者A)、下位(保護者C)の生徒のうち代表として1名ずつ、教師は、クラス担任、心理科目⁶と一般科目といった各担当教師からそれぞれ選抜した。概要は、以下の通りである。

① 保護者たちへのインタビュー結果

学業成績の高い寄宿生は、親とのコミュニケーションの頻度が高く、親は、子どもの精神的健康に関心をもつことが多い。逆に、学業成績がよくない寄宿生は、親とほとんど交流をすることがない、多くの場合はクラス担任や周りの友達から把握することが多い。親も、子どもの精神的健康よりも、学習に関心をもっている傾向にある。子どもが家にいる時は、インターネットで遊ぶ時間が長く、勉強する時間がかなり短いか勉強することがなく、自己抑制能力が低い。

② 教師たちへのインタビュー結果

教師と積極的にコミュニケーションをとる生徒がいる一方で、あまり話しかけてくれない生徒もいる。クラス担任から親たちに連絡をとることが多いため負担が大きい。学校は、寄宿生たちのバランスの取れた学習を実現するために部活動を開始することで、ある程度寄宿生の学習に対するストレスを解消した。家庭関係に影響されている生徒が多く、学業に対して散漫な態度をとっている学生がいる。親の愛着に欠けた生徒は、成績が下位である傾向にある。こうした子どもは、話をしたがらない、いつも何かを考えているような顔をするか無表情、授業に集中できない、学習成績も悪いことなどが多い。生徒がインターネット、スマートフォンに夢中になりがちで、学業成績に大きな影響を及ぼしている。

3.5 考察

寄宿生のように、長時間、家族や親元から離れて暮らすことは、親との愛着、交流を阻害することになるため、寄宿生の教育に影響を与える要因の一つになるというのが本稿の仮説であった。この仮説を検討するために、寄宿生へのアンケート調査および親と教師へのインタビューを行った結果、親との愛着関係や教育上のコミットメントなどの社会的絆との関連性が示唆され、寄宿生の社会的絆を増やすことにより、良い影響を与える可能性が見られた。調査の結果として、以下の6点について記しておきたい。

1. アンケート調査による表1によれば、積極的に親とコミュニケーションを取るほど、親との愛着の絆が強くなるものの、客観的な学業成績と関係があるとは言えないが、主観的学業成績満足度が高くなるという傾向が見られた。ハーンは、少年の犯罪や非行の抑制要因である4つの絆「愛着」、「コミットメント」、「巻き込み」、「規範観念」のなかで、少年の非行行動の

抑制に果たす役割に大きく関わっているのが、「愛着」の絆であると論じている。寄宿生のような親元や家族から離れて暮らしているが、親とコミュニケーションを取ることを通して、親子の愛着の絆が強まり、主観的学業成績満足度の向上につなげることができる。このことにより、親との愛着関係が形成する前提として親とのコミュニケーションが必要ではないかと考えられる。

アンケート調査から、親と連絡を取る頻度が高い寄宿生は主観的学業成績満足度も高いことがわかった。この結果は、親とのコミュニケーションの意義に着目させるものである。寄宿生は親とコミュニケーションを取ることで親に十分に愛情を注いでもらい、幸せを感じ、愛着関係が形成される。「親とのコミュニケーション」と「親とコミュニケーションを取る頻度」といった変数のどちらも寄宿生の客観的な学業成績とは相関が見られなかったが、主観的学業成績満足度が高まるという結果は、親がきちんと向き合っている子どもは、親とよくコミュニケーションを取ることで、お互いの感情や思いを表現したり、打ち明けたりすることで、より親密な関係を築くことができ、主観的学業成績満足度の向上につながっていることを示している。ただし、親とコミュニケーションをとることは寄宿生の主観的学業成績満足度に影響を与えることは分かったものの、寄宿生は自分の主観的学業成績に満足することで、学業に対する努力を怠る可能性もある。そのため、寄宿生の客観的学業成績との関係性については、さらなる検討の余地がある。

2. 高田 ([1922]2003: 167) によれば、個人の日常生活において取りもつ人間関係には限界がある。それゆえ一方の人々との結合が強ければ、他方の人々との結合は弱くなる。つまり、個人が取りもつ人間関係のなかで、ある集団との絆が強まると、別の集団との絆が弱まる。しかし、本アンケート調査では、こういった結果が得られなかった。むしろ、高田 ([1922]2003) 「結合定量の法則」の反命題の可能性が示唆された。表1によれば、親とよくコミュニケーションを取る寄宿生は教師ともよくコミュニケーションを取るという結果が得た。寄宿生は親元から離れて暮らしているが、よくコミュニケーションを取ることで、学校という場でも教師との新たな絆が形成している。そして、表1では、「親とよくコミュニケーションを取る」、「教師とよくコミュニケーションを取る」といった変数は「ルームメイトとの仲の良さ」との相関関係が見られた。

この結果をハーシの社会的絆理論の視点から検討すると、寄宿生は親元や家族から離れて学校で集団生活をしているが、教師や生徒同士との愛着の絆も形成されていることが明らかになった。寄宿生は親と積極的にコミュニケーションを取ると親との愛着の絆が強くなり、学校で、教師や生徒同士ともコミュニケーションを取ることで、教師や生徒同士との愛着の絆も強くなる。つまり、親との愛着の絆が強ければ、教師や生徒同士との愛着の絆も強まる。学校に通うことで新たな絆が形成され、寄宿生のコミットメント、巻き込みなどの絆に良い影響

を与えるのではないかと考えられるが、具体的にどんな影響を与えるかについて本アンケート調査からは明らかにすることができなかった。

ハースが強調する「愛着」の絆を形成することは非常に重要であり、コミュニケーションを取ることで、愛着関係が形成する。寄宿生のように親元から離れて暮らすことは親との愛着の絆が弱まる可能性があるが、かえって新たな絆を生み出す機会になり、学習のみならず、これからの人生や発達に大きな影響を及ぼすこともあると言える。

寄宿生は学校で集団生活をするなか、新たな絆が形成することは本アンケート調査からわかった結果である。このような新たに形成された愛着の絆が寄宿生にどのように影響を与えているかについて考察してみると、教師と積極的にコミュニケーションを取ることは寄宿生の学業成績向上に意味があることがわかった。表1によれば、「教師とのコミュニケーション頻度」と「寄宿生の学業成績」との相関関係が見られ、寄宿生は教師とよく話し合うことにより、学業成績向上につながる可能性が示唆された。

3. 寄宿生は教師と積極的にコミュニケーションを取ると、教師との愛着の絆が生まれ、教師との距離が縮まり、教師からさまざまな知識や人生経験を学ぶことで、より多くのことを学び、早く成長することができ、学習状況に合わせたアドバイスや指導を行い、成長の手助けをすることができる可能性があると考えられる。だが、本アンケート調査では、教師とよくコミュニケーションを取ることは寄宿生の学業成績向上に影響を与えるという結果が得られたものの、どういった話が学業成績向上につながるかについて明らかにすることが出来なかった。そして、ハースは愛着の絆である親との愛着の絆を強調しており、この絆が弱まったとき、教師との愛着の絆が親と機能的等価と言えるかどうかは、検討の余地がある。また、男女別に分析してみた表2によれば、男子生徒より女子生徒の方が、教師とよくコミュニケーションを取り、学業成績も高い傾向にある。これは、女子生徒の方が教師との愛着の絆が形成しやすいか、女子生徒の方が授業中に集中力が高いかといったさまざまな原因が挙げられるが、本アンケート調査から明らかにすることが出来なかった。

4. 年齢層に分析した表3をみていくと、年齢が上がるにつれ、ルームメイトとの絆が弱まっていることがわかった。教師に行ったインタビューによれば、年齢があがるにつれ、ルームメイトとの絆が弱まる原因は、生徒たちは部活動に参加することで新たな絆が形成されているのではないかと考えられる。教師Cによれば「生徒に毎日同じことを振り返って退屈を感じさせないよう、近年からさまざまな部活動を開始した。これにより、生徒の勉強に対するプレッシャーをある程度で軽減することができた。私はこうした教育活動や心理的側面に焦点を与えた活動を重視する必要があると思う」と述べている。

学校は生徒たちの学校生活を豊かにするために部活動を設けて、教育活動の多様性を作り出し、生徒たちの学校へのつながりをより強くしていることがわかった。生徒は部活動に参加す

ることにより、教師や同級生あるいは上級生、下級生とコミュニケーションをとり、切磋琢磨することで愛着の絆が生み出され、学校生活がより楽しく、より魅力を感じるようになるだろう。寄宿生は家族や親元から離れて暮らすことで親子の愛着の絆が弱める可能性があるが、部活動に参加することにより、仲間との愛着の絆が形成されるだけでなく、学校への愛着の絆も形成される可能性が示唆された。

上述のような寄宿生は部活動に参加することによる新たに生まれた同級生或いは上級生、下級生との愛着の絆は、年齢が上がっていくにつれ、ルームメイトとの関係が疎遠となる原因だと思われるが、それ以外にもルームメイトとの絆を弱める要因があるだろう。これは、今後、検討する意味のある課題だと思われる。

5. 本稿は、寄宿生のように、長時間、家族や親元から離れて暮らすことは、親との愛着、交流を弱めるため、寄宿生の教育に影響を与える要因の一つになることを仮説としたが、アンケート調査を通じて、寄宿生の親との愛着関係は客観的学業成績よりもむしろ主観的学業成績満足度と関係がみられた。また、本稿の仮説をさらに検討するため、保護者や教師にインタビューを行った結果、親とのコミュニケーションと客観的学業成績の関係が示唆された。

インタビュー対象者である保護者Aは「うちの子どもは、学習や寄宿生活について何も話してくれない、多くの場合はクラス担任や周りの友達から把握している。私は、子どもの学習成績が一番大事だと思うから、特に、学業成績に注目している。心理的变化や精神的健康について関心をもったことが少ない」と語っている。保護者Bによれば、「うちの子どもは学習や未来の計画に関して、いつも話してくれるし、学業成績もクラスのなかで上位くらいだから、休日、家にいるとき、勉強を求めている」と述べている。だが、保護者Cは「うちの子どもの学業成績が悪いから、学習についてとても心配です。クラス担任にはよく相談するが、子どもとのコミュニケーションが少ない、うちの子どもも自分からは何も話してくれない」と述べている。

インタビュー内容からみると、学業成績が上位の生徒は親とよく話し合い、学業成績が中位、下位の生徒は親と話し合うことが少ない、あるいはないように思われる。生徒は親とコミュニケーションを取るほど親との愛着の絆が生まれやすく、親に愛されていると感じ、幸せになると学業成績に良い影響を与えていると考えられる。

インタビューでは、親とのコミュニケーションと寄宿生の客観的学業成績の関連がみられたが、アンケート調査の結果からは、親とのコミュニケーションと客観的学業成績との間に関連性があるとはいえないという結果になった。アンケート調査によれば、親とのコミュニケーションと関連があるのは、主観的学業成績満足度である。これは、寄宿生の教育問題における、主観と客観との緊張関係を示していると解される。そして、今回は数少ない寄宿生を対象にアンケート調査や、保護者を対象にしたインタビュー調査とした研究であるため、過度な一

般化は避けるべきであろう。

6. 最後に、インタビュー調査から明らかになったことを記しておきたい。

インタビュー対象者である教師Cは、「自分が中学2年のクラス担任をしているため、何かあれば、すぐ保護者や親に連絡したり、学校、家庭、子ども間の調整者となっている」と語っている。教師Bは「私は心理科目を担当しているから、生徒に関して私の方から親と連絡することはなく、全てクラス担任に報告し、またクラス担任の方から保護者たちと連絡をとっている」と述べているように、学校と家庭の関係において、クラス担任が大きな役割を果たしていることが分かった。家庭と学校との連携のなかで、保護者と最も直接的に接する者はクラス担任であり、家庭と学校の連携の架け橋となり、教育の実施者と調整者の二重の役割を果たしている。

重盛・村山(2017)によれば、教員の勤務負担がかなり重いことは事実であり、児童生徒が安心して学習できる環境づくりも大事だが、教員は時間的なゆとりを持つべきであり、中国においても教員の勤務時間が長く、負担が大きいことなどが現実としてある。社会的絆の視点から見ると、クラス担任が、学校や家庭の間の橋渡しに重要な役割を果たしている一方で、過度な負担により、かえって、生徒との社会的絆の形成機会を逸しているのではないかと思われるケースがある。そのため、教育システムのなかで、クラス担任の役割を再考することは、無視することのできない重要な課題である。

本稿から得られたクラス担任の役割を再考する事例を挙げると、教師Aは「学校では、生徒に優しく、堅苦しくない授業をする若い先生が人気です」と述べている。若い先生の教育方法は、生徒たちに受け入れられやすく、生徒の学習意欲をより高めることができる傾向があると考えられる。生徒たちにとって若い教師は、教師というより、先輩やメンターの存在として、親との愛着以外の社会的絆を築く可能性があるだろう。小宮(2005)によれば、就学後の危険因子として学業不振、中途退学などがあげられるが、発達の犯罪防止などの立場からは、学齢期において、学習指導というメンターの形で介入することで学齢時期に犯罪を犯さないように支援できると述べている。近年、年齢の近い大学生などがメンター的な存在として、学生たちを学習支援していることが注目されてきていることから、メンターとして形成される新たな「絆」は生徒たちの教育に影響を与えるかどうかは検討する意義のある新しい視点だと考えられる。

結論

寄宿生は親元や家族から離れて暮らすのが、コミュニケーションを取ることにより、主観的学業成績満足度が高まるという結果を得ることができた。それと同時に、学校で教師と新たに形

成した「絆」により、客観的学業成績の向上につながることも明らかになった。寄宿生は学校という場で集団生活を送るなかで、教師や生徒同士、上級生、下級生とのコミュニケーションにより、新しい絆を生み出し、その結果として寄宿生の教育上の発達に良い影響を与える可能性が示唆された。

つまり、本稿を通じて、寄宿生が親元を離れて暮らすことと親との愛着関係や教育上のコミットメントなどの社会的絆との関連性が浮かび上がったと同時に、寄宿生の親元を離れて暮らすことは、彼・彼女らの主観的学業成績など教育上の発達に一定程度で影響を与えていることが明らかになった。

アンケート調査やインタビュー調査からは、親、家族以外とのコミュニケーションの意義が示唆されたと同時に、ハーシの社会的絆理論を補助線にして考察すると、寄宿生の仲間、学校との「絆」を増やしていくことは学業成績の向上などの効果にも期待できる。

まとめ

新中国の成立以来、少数民族地域や自然環境の厳しい地域において教育発展が遅れている問題に対応して、寄宿制学校が設立されていった。寄宿制学校は、人口分散や学校配置の撤廃・統合など原因によるすべての学齢期の子どもに教育を受けさせるという課題だけでなく、近年、中国において社会問題になっている「留守児童」問題の解決にも資するものになっている。第1節で論じている先行研究のように、寄宿制学校で暮らす子どもたちには、安全問題、心理問題、教育問題などの課題が山積している。しかし、これらの先行研究のなかでも、寄宿生が親元から長期間にわたって離れて暮らし、親との関係が疎遠となることの教育上の影響について理論的に考察した研究が少ないことに気づき、本研究に着手した。

本稿では、アメリカの社会学者であるハーシの社会的絆理論を補助線にし、筆者の故郷の寄宿制学校の寄宿生を対象にアンケート調査、その学校の教師や寄宿生の親を対象にしてインタビュー調査を行い、寄宿生が親元から離れて集団生活を送ることが教育に及ぼす影響について分析した。

その結果、寄宿生が親元を離れて暮らすことが、親の愛着などの社会的絆、および教育上（主観的学業達成度など）の発達やコミットメントにある程度で負の影響を与えているという可能性が示唆された。一方で、学校で集団生活を送るなかで、親以外の新たな絆が形成され、寄宿生の発達に良い影響を与える可能性についても浮かび上がってきた。

本稿は、寄宿生の教育問題について、親との愛着関係やコミットメントに着目して行った研究であるが、内モンゴル自治区におけるひとつの学校において、寄宿生や数少ない保護者と教師を対象者にした調査を元としているため、一般化には慎重になるべきである。また、やむを

えず親元を離れて暮らさざるを得ないさまざまな背景についても目を向ける必要がある。しかし、本研究においては、寄宿生の教育上の問題における社会的絆の意義について、重要なインプリケーションが得られた。今後も、より多くの寄宿生や教師、保護者を対象としたインタビュー等の調査を継続的に行っていくことが有効と考える。また、インタビュー調査からは、親の夫婦関係などの家族関係、インターネット等のメディアも生徒の教育に一定の影響を及ぼしていることが示唆された。こうした面についても、今後検討していく必要がある。

注

- 1) 少数民族教育の略称であり、特に漢民族以外の 55 の民族に対して実施する教育のことを指す。
- 2) 巡回小学校とは、居住地域へ教師が牧育の繁忙期を避けて出かけ、数ヶ月指導するような形態をいう。
- 3) ユルト小学校とは、一時的に作られたユルトの中に学習することをいう。「ユルト」とは、ゲルと同じ意味であり、ウズベキスタンやカザフスタンなどの中央アジアで用いられている用語である。
- 4) 近代化にともない農村から都市へ移動する出稼ぎ労働者が増加したが、その労働者は戸籍制度や経済面から子どもと一緒に都市部で生活することは難しい状況にある、留守児童とは、農村部に残された子どもたちのことを言う。
- 5) 本稿が「実子主義」と「家庭主義」に依拠していると思われるかもしれないが、本稿はそれを「相対化」する視点をもっている。福祉社会学の領域で論じられているように、かつて日本では、子どもの健全な成長に関して「実子主義」と「家庭主義」を強調していたが、1970年代以降、現在まで続く「新しい児童問題」という問題機軸の枠組のなかでは、「理想的な育児規範を遵守する実親」と「理想的な育児規範を遵守する家庭」といった「理想」の結果として捉えるようになってきた。しかし、この問題機軸の枠組から「逸脱」した子どもたちは「施設養護」という場所で生活を送るのが望ましいという新たな育児規範が形成されている。つまり、日本社会での「育児の社会化」をめぐる実子主義と家庭主義という育児規範は、時代の「新しい児童問題」形成のなかで新しい位相に移行した（土屋 2016: 170-171）。
- 6) 近年、青少年のメンタルヘルスに注目が集まっており、メンタルヘルスを必修化する県が中国において増えてきている。

文献

白亮（2009）关于西北民族地区寄宿制学校办学若干问题的思考，当代教育与文化，1（6）：18-

23.

陈铭书·崔延明(1984)以「三个面向」为指针改革高等教育. 信阳师范学院报·哲学社会科学版, 4:1-5+16.

董世华(2014)农村寄宿制中小学发展的历史沿革与反思. 当代教育论坛, 1: 11-20.

董天慈·熊旭(2013)调查数据显示:寄宿制学校已成为农村学校主体.

[http://edu. people. com. cn/n/2013/0926/c1053-23043340. html](http://edu.people.com.cn/n/2013/0926/c1053-23043340.html) (参照日 2013 年 9 月 26 日)

郭清扬(2014)义务教育均衡发展农村寄宿制学校建设. 教育与经济, 4: 36-43.

何庆林(2015)农村寄宿制学校教师管理存在的问题及解决对策. 青年时代, 2: 169.

后慧宏·袁梅(2019)改革开放 40 年我国民族寄宿制学校变迁的回溯与前瞻:基于教育治理的视角. 广西师范学院学报, 40 (2): 108-116.

ハーシ, T. 森田洋司·清永新二監訳(1995)非行の原因——家庭・学校・社会のつながりを求めて. 文化書房博文社. (Hirschi, T. (1969) Cause of Delinquency. University of California Press.).

小宮信夫(2005)犯罪は「この場所」で起こる. 光文社.

李娟(2018)农村寄宿制小学生心理健康状况调查研究:以山西省 A 市为例. 广西科技师范学院学报, 33 (1): 87-90, 106.

穆锦(2019)浅谈农村学校寄宿生安全教育的深化. 速度·上旬, 4: 31.

麗麗(2018)中国農村部の子どもへの学校統廃合の影響——内モンゴル自治区寄宿制学校調査を手がかりにして. 福祉社会開発研究, 10: 73-82.

重盛啓仁·村山拓(2017)教師の勤務時間の現状に関する研究動向:中学校における部活動による勤務負担に注目して. 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 68 (2): 145-154.

土屋敦(2016)「施設養護」での育児規範の「理想形の上昇」——一九六〇年代後半から七〇年代前半を中心に. 野辺陽子·松木洋人·日比野由利·和泉広恵·土屋敦(2016)〈ハイブリッドな親子〉の社会学——血縁・家族へのこだわりを解きほぐす. 青弓社.

高田保馬([1922]2003)社会学概論. ミネルヴァ書店.

烏力更(2013)中国モンゴル民族学校教育とアイデンティティに関する研究. 佛教大学大学院紀要·教育学研究科篇, 41:1-17.

张小紅(2019)寄宿制学校学生的现状及管理策略. 甘肃教育, 16: 22.